

《公開講演会記録》

中ロ・日ロ関係の現状と北方領土

朝日新聞論説委員 大野 正美



去年の10月、極東の中ロ国境にある大ウスリー島（中国名・黒瞎子島）へ行ってきました。現在、ここは中ロ関係の最前線となっています。というのも、この島はロシアのハバロフスク地方の中心都市ハバロフスクの目の前にあり、国境となっているアムール河とウスリー河の合流点に位置して、350平方kmもある大きな島です。この島は西隣りにあるタラバロフ島（中国名・銀竜島）、さらに東部国境のアルグン河にあるボリシヨイ島（中国名・阿巴該図ⅡアバガイトⅡ島）とともに、中ロの国境画定交渉では最後の最後までめめたところでは最後

の最後までめめたところでは最後の最後までめめたところでは最後

の面積の合計をおよそ半分に分けています。つまり大ウスリー島は、ボリシヨイ島とともに陸地に新しい国境を引き、ロシアが島の領土の一部を中国に引き渡すことになって決着した因縁の場所であり、今では新しい中ロ友好の象徴ともなっているわけです。

その後、12月には朝日新聞社の飛行機で北方領土のすぐそばまで飛びました。その様子も交えて中ロ関係、日ロ関係、そして北方領土問題を考えてみたいと思います。

中ロ友好の象徴？

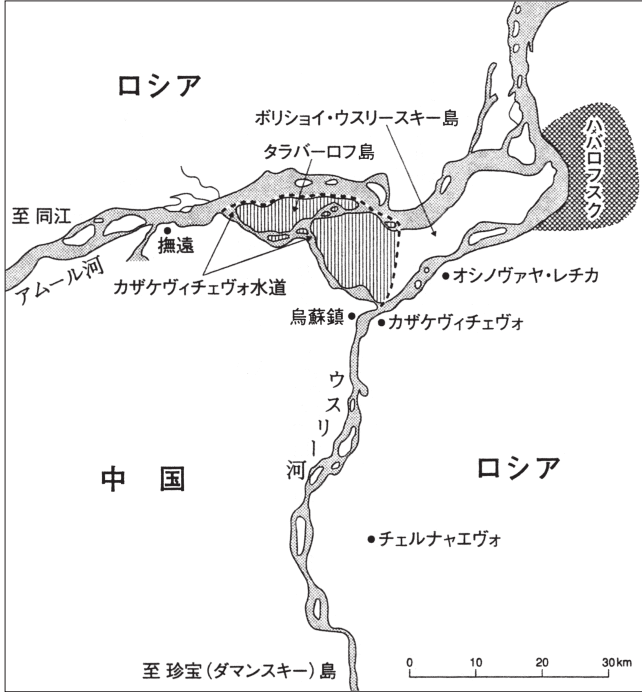
大ウスリー島の現状

中ロ関係は、ロシアがモスクワから東

へ拡大してきた歴史の中で形成されてきました。その過程で1689年のネルチンスク条約は対等の内容だったので、19世紀のアイグン条約、北京条約によって清朝は広大な領土をロシアに奪われ、極東の国境はアムール、ウスリーの両大河とされて現在に至っています。

両国が社会主義体制になってからも国境はなかなか決まりませんでした。1969年にはダマンスキー島（中国名・珍宝島）で武力衝突事件が起き、中国が武力で島を奪った事件が有名です。なにか問題かというところ、河川の国境というのは中州の島がある場合、船が通る主要水路、つまり主要航行路を国境とするというのが通例なのですが、歴史的にずっとロシアのほうが軍事的に強かったために、中国とロシアの場合、中州の島と中

黒瞎子島 合意された国境線



岩下明裕『北方領土』(中公新書) 113頁より

さてその大ウスリー島ですが、島の両側の水路を比べれば、アムール河でもウスリー河でもロシア側の水路が大ウスリー島とタラバロフ島をぐるりと取り囲む形で主要航行路となっていて、中国側水路より幅がずっと広い。ですから普通ならこの二つの島は中国領ということになるわけです。実際、中国領とタラバロフ島の間水路な

国側の岸との間が国境とされ、島はロシア領というふうにならざるを得ないわけですね。その後、両国とも社会主義になってから、国境の見直し交渉が動き出して国境線を引き直そうということになったのですが、なかなか話はずかず、中ソ対立があったりして、武力衝突にまで至ったのです。

ダマンスキー島では当時のソ連軍はいぶやられて大きな損害を出しました。ハバロフスクの軍事博物館には、196

9年3月の衝突事件関係の展示が今でも残っていました。今、両国関係は戦略的パートナーシップをうたっている。だからといって友好ムードの中でも、両国の衝突をロシア側は忘れてはいるわけではないのです。

とはいえ、この軍事博物館の主たる展示は基本的には第二次大戦末期の日ソ戦争に関わるものです。日本軍からの捕獲品とか、作戦のパノラマなどが展示されています。



ウスリー河の渡し船 (大野正美氏撮影)

どは本当に狭いです。ひところは、中国軍が夜の間に大量の兵士を動員して水路を狭める作業を続けている、というような噂すら出たほどです。

しかし、ロシア革命の後、日本など列国の干渉軍が占拠していた大ウスリー島をロシアが1924年に奪還したとかいろいろな歴史的経緯があったあと、1929年にソビエト軍が占拠してソ連領となった。その後、長い年月がたったこともあって、ここにはロシア市民の畑があり、コルホーズも出来ていたり、空港の誘導灯が設置されていたり、またロシアの部隊の兵営もずっとあったのです。

したがって重要性からみて、原則どおりに中国に渡すわけにはいかないというのがロシアの立場でした。60年代から国境画定交渉が始まりましたが、ゴルバチョフ時代の1991年に中ソの東部国境のほとんどが画定しても、このハバロフスクの2島は未解決で残り、最終的には西部のポリショイ島と大ウスリー島の分割、およびタラバロフ島全部の割譲が2005年6月2日に決まりました。この時、中国領となったのは全部で337平方kmだそうです。これは255平方kmの色丹島と98平方kmの齒舞群島を足したのより、僅かに小さいくらいの面積とな

ります。

さて、その大ウスリー島ですが、全島まったく平らで、基本的に草地が広がっている合間に畑地があるようなところですね。とにかく中国との国境地帯となっているので、その出入りには地元のハバロフスクの市民でないと、基本的にロシアの国境警備隊の許可を必要とします。これは、ロシアの国境地帯ではどこでもそうなのですが、最近になって新たに中国との間に国境ができたところとあって、特にきびしくなっているのかもしれない。在ハバロフスク日本総領事館の高橋二雄総領事の話では、昨年春に着任した直後、現地の外交団を通じて大ウスリー島の視察の許可を申し入れたのだが、10月になってはまだ許可が出ていないとのことでした。

そこで、とりあえず島の間近まで行ってみたのですが、ハバロフスクの中心部からタクシーで40分くらいかかりました。すでに周辺からなだらかな平原なのですが、島そのものもウスリー河を隔てて、本当に平らで建物とかの構造物は基本的に何も見えません。平らな陸地の向こうには中国の山々が連なっています。このあたりのウスリー河は流れもゆるやかで、川幅も数kmもあるアムール河とく

らべると、数十メートル程度しかありません。冬にはすっかり氷結するそうです。ロシア側の岸との間にはボンボン蒸気のような船にはしけをくっつけたようなものが、車を載せて往ったり来たりしています。分割されたあとでロシア側に残った東部にはウスリースクというロシア側の集落も残っていて、約400人がなお住んでいるとの説もあります。ここに住んでハバロフスクに通ったりしている人もいて、行った時は夕方の5時近くまではしけが動いていました。

夏の間はこのウスリー河に浮橋が作られるとのことで、その跡もありました。この浮橋を使って人が大勢やって来て畑の取入れなどをしています。冬は用事もなくなるし、氷結してしまいますので、浮橋は外すということでした。

経済協力へのロシアの心配

浮橋の先の左側の中国国境に向かう西側の方には、軍事施設が残っているという事です。また、そこと反対側の東側には草原が広がるばかりですが、一部は畑地となっていてコルホーズの施設や、また川に沿っては漁師の番小屋などもあるようでした。

今回、大ウスリー島の半分とタラバロフ島を引き渡したあと、中国側と橋でロシア側をつないで経済交流を活発にして、レジャーランドを共同して作ろうといった計画はあるようですが、ロシア側を見る限り経済効果は疑問です。

中国側は大ウスリー島に対岸から橋をかけ、通関施設やショッピングセンターを作るといふ動きが現実が始まっており、ロシア側にもそれに応じた計画があるということですが、ロシア側はあまり活発ではない。中国がそれほどハバロフスクに対して投資をしてくれないのに、道だけがつながると、ロシアの資源、材木とか石油とか、燃料とか、鉱石とかが中国に流れ出て、かわりにそれらを使って作られた工業製品が大量にロシアに入ってくる、そういう一方的な貿易関係になるのではないかという警戒心が強いように見えました。

中国は近いのでそういう心配が生まれるようですが、日本に対しては距離があるので警戒心があまり働かず、ハバロフスク地方では日本の地位は上がっているとの見方もあります。去年、ロシアは9月2日を第二次世界大戦勝利の日と決めましたが、北方四島を抱えるサハリン州では知事がその式典に参加したのに、ハ

バロフスクでは大統領の極東代表といふこの地域で最も重要な人物が式典に出なかった。この人は前のハバロフスク地方の知事でもありますが、日本に気を遣って式典に出なかった。代わりに格下の現知事だけを参加させたのです。そういう微妙なところがロシアの極東にはあるように感じました。

それから最近、ロシアは北方四島にさかんに投資をして、実効支配を確固たるものにしようとしていると言われますが、ハバロフスクから150kmほど離れたユダヤ自治州に行ってみたら、ここにもだいたい中央政府や経済界からの投資が行われていた。ユダヤ自治州の州都ピロビジャンとハバロフスクを結ぶシベリア鉄道の物流もきわめて活発です。そういう意味では、北方四島だけでなくシベリアや極東の全体で開発が進んでいるのではないかという感じを受けました。

けれども、ハバロフスクから大ウスリー島に向かう地域ではそうした経済の活発な動きは感じませんでした。ただ、草原がだらだらと広がっているだけです。こうした地域が中ロの新しい友好のシンボルという位置づけをされている、新しく通じる陸路によって一気に発展するのでしょうか。これはかなり注意深く

見ていかなければならないというのが、偽らざる印象でありました。

北方領土を飛ぶ

次に北方領土を空から見た印象をお話



国後島爺々岳

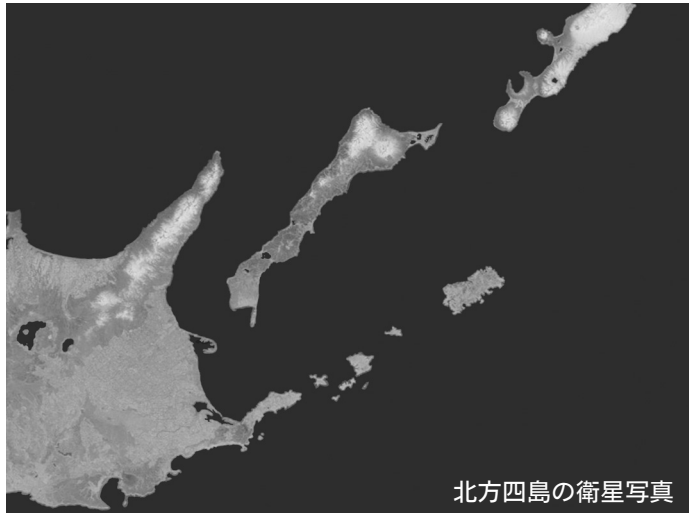
します。国後島は根室半島と知床半島の間、食い込むような形で広がっているのですが、この島はほんとうに大きいです。それが目の前に見える

わけです。1498・8平方kmの面積は、1207・87平方kmの沖縄本島より大きいと聞くと、北方四島の大きさが分かります。これが択捉島ともなると、3184平方kmもあります。国後島は北のほうに爺々岳（ちゃちゃだけ・1822m）、南に羅臼山（らうすさん・887m）と二つの山があり、羅臼山は知床からよく見えます。行った12月は冬で漁

船が漁をしていないので、暇な漁業監視船がお客を乗せてロシアとの境界ぎりぎりまで行きます。しかし、国後島は海からだと大ウスリー島と同じように平べったいのか、波の合間にだいたい離れて爺々岳と羅臼山だけが、島のように見えるだけです。

さて、国後島をロシアとの境界に沿って飛んだのですが、空から見ただころでは、人工物がさっぱり見えません。陸地に切り込んだ湾や山々が見えるだけです。しかし、端から端まで飛んでも、7〜8分しかかからないような気がしました。この国後島よりも小さいのにたくさん米軍基地を抱え込まされた沖繩というのは、本当に大変なのだなということもあらためて感じました。

つぎに根室半島のほうへ回りこむと、歯舞群島が並んで見えます。根室からは目と鼻の先です。空を飛んでいると、自衛隊がレーダーでわれわれをウォッチしていますので、「対口境界まであと3マイル、回避せよ」と無線で呼びかけてくる。それでも飛び続けると「あと2マイル、回避せよ」、「あと1マイル、回避しろ！」と叫んで来ますので、そこでびゅーっと旋回するという具合です。ほんとに近いですから、ちょっと間違える



北方四島の衛星写真

と、ロシアの「領空」に入ってしまった。それでも見えるのは、志発島や水晶島などの歯舞群島だけで、色丹島は見えませんでした。本土から国後島の16kmに比べて色丹島の73kmという距離はやはり遠いのですね。

その北方領土をのぞむ根室で聞いた話ですが、一口に北方四島といっても出身の島によって元島民の方々の事情はいろいろ違うようです。択捉島には、鉾山の

開発とか、漁業とか、戦前、国策会社が多く、3600人の人口のうち普通の住民の集落はあまりなかった。国後島は7300人ほどの人口があり、普通の集落が出来ていた。色丹島は住民が1500人くらいで、それに対して面積は四島の2%しかなかった歯舞群島には4500人もが住み、漁業が盛んで四島の水揚げ量の8割くらいを占めていたそうです。

その歯舞群島には歯舞村というのがあって、戦後、法的には根室市に合併しています。歯舞群島の人たちは、距離が近いこともあって戦後すぐに多くが根室に移り住みました。しかし、国後、択捉両島はソ連軍が占領してからも、住民はしばらくそこに留まっていた、サハリン経由で北海道に戻ってきた人が多い。それで根室には比較的少なく、たとえば富山県辺りに住んでいる人がかなりいる。四島は日本領ということで、地方交付税が出ているのだそうですが、歯舞分は根室市に入り、あとの三島分は北海道に入っているということでした。

現実的な話としては、根室は歯舞の豊かな漁場を失ったことで疲弊している。だから歯舞、色丹の二島だけでも戻ってくれば、経済的には助かる、と言っていました。歯舞出身の引き揚げ者の人たち

が言っていたのですが、自分たちは政府が真剣に一生懸命に交渉をやった結果、二島返還で妥協するしかないとなれば、われわれはそれを支持するということでした。つまり、齒舞、色丹の二島返還でも、豊かな漁場がかなりな程度に戻ってくるので地元の経済はおおいに助かる。だから一生懸命に交渉した結果が齒舞、色丹の引き渡しなら、それで交渉を収めるのにやぶさかでない、ということを暗に示しています。ただ、全国的に四島返還でやってきて、応援も受けてきたので、われわれから「二島返還」とは言えないと言っていました。なかなか苦しい立場のようでした。

ロシア要人の国後訪問の意味は？

さて、去年の11月にメドベージェフ大統領が国後島を訪問しました。その後もロシアの要人の国後訪問が続き、日ロ関係は緊張しました。そこへ3・11の大震災があり、要人の訪問は途絶えた。さらにプーチン首相が「日本は重要なパートナーで、大事な国である。その国がこういう大変な目にあっているのなら、なんらかの協力をしたい」と、エネルギー協力、とくに液化天然ガスの緊急供給を申

し出たり、メドベージェフ大統領夫人がモスクワの日本大使館へ弔問の記帳に訪れたり、という動きがあり、対日政策が変わったのではないかという見方も出てきました。

ところが、5月のG8首脳会議で菅直人首相とメドベージェフ大統領の首脳会談が行われる直前にイワノフ副首相が国後に行った。ということで、ロシアの対日政策は「変わったようでもあり、変わっていないようでもある」というのが現状です。

そこでロシアの要人の北方四島訪問と国内政治との関係をあらためて見直しますと、一つのことには気づきました。

2007年という年は12月に議会の下院選挙があり、翌年3月には大統領選挙が控えていました。そしてこの年、4月にイワノフ第一副首相、6月にラブロフ外相、8月にグレフ経済発展貿易相が国後島を訪れています。そして4年後の今年ですが、やはり12月に下院選挙、来年3月に大統領選挙が控えています。つまり下院選挙、大統領選挙と続く年には要人の北方四島訪問が多いということが分かります。

07年のイワノフ第一副首相は今年5月に行ったのと同じ人物です。この人は05

年にも行っている北方領土のリピーターです。07年はメドベージェフ大統領も当時は副首相で、次期大統領の座をイワノフ氏と争っていました。来年3月の大統領選挙ではプーチン首相が再度出馬するのではないとも言われていますが、ロシアの議会と大統領の選挙は、ロシア要人の北方四島訪問と何らかの関係があるのではないかという感じがします。

というのは、ロシアでは大統領が国防と安全保障と対外政策を基本的に担当しています。首相は経済政策が基本です。ですから大統領になるには、対外政策と安全保障でそれなりの実績をきちんと示さなければならぬわけです。ですから領土問題を抱える日本に対して何らかの政策をやり通したということが、権力層内部で一つの資質とされるのではないか、という面もあるように思われます。

ただそれが一般の国民にアピールするかというと、それはまた別問題です。メドベージェフ大統領が去年11月に国後に行った後、12月にシュワロフ第一副首相、今年1月にバサルギン地域発展相、2月にセルジュコフ国防相、そして5月にイワノフ副首相を国後に行かせました。このうちセルジュコフ国防相にはクルル（千島列島）をきちんと守れるよう

に、軍の近代化、装備の近代化を図るようにと指示し、それがテレビでも放映されたりしました。

しかし、こういう対日政策を続けた結果、支持率はどうなったかといいますと、「世論財団」の調査によると、大統領が国後に行った去年の11月と要人の国後行きが一段落した今年4月を比べると、プーチン首相は69%から53%へ、メドベージェフ大統領は62%から46%へ、彼らの与党である「統一ロシア」は53%から43%へと、いずれも支持率は下がってしまいました。つまり日本に対して強硬な姿勢をとっても国民の支持にはつながらないように見えます。数字を見る限りはそうです。

ロシア国民は感情的な国民ですから、東日本大震災での津波の映像とか、瓦礫の山とか、福島原発事故などを見て、日本人は大変だ、可哀想だという感情が自然にわきあがって来た。そうなる、もともとそう国民受けしない対日強硬策をこれ以上続ける意味はなくなってしまうのではないかと思われまます。

それでは5月にイワノフ副首相は何のために行ったのかということになります、それはメドベージェフとしては、いったん始めた政策の一貫性を保たなけ

ればならない。やめれば、成果の少ない政策だったことを事実上認めることになる。それは自分の弱さにつながる。だから閣僚を派遣して開発を進めるという方針は一貫している、ということを見せざるを得なかったのではないのでしょうか。

支持率の低下に見られるように、下院で3分の2以上の議席を持っている「統一ロシア」という政党はじつは汚職まみれで「泥棒といかさま師の党」などと言われるくらい評判が悪い。これから年末に下院選挙、さらに来年3月には大統領選挙があります。いまのところプーチン、メドベージェフのどちらが出るかわかりませんが、ともかく支持率を回復するのが急務のようです。一方の日本側も震災対策などに追われて、対ロシア政策をどうこうするという状況ではありませんから、双方とも派手な対外政策は打てないのではないのでしょうか。

それでは現実にロシアはどの程度、北方四島に力を入れているのか。まずお金ですが、日本が北海道に出している額の数分の一程度です。大したことはありません。次に軍備ですが、北方四島には第18機関銃砲兵師団というのが駐留しています。その実数は1991年当時、約9500人いたのが現在では3500人程

度に減っている。これは従来の1万人もしくはそれ以上の師団単位中心だったものを数千人規模の旅団単位に再編成するというロシア軍の改革とも関連するのでしょうか、師団という名前は残っていても数は減っています。それにもなっていない千島全体に五つの部隊があったのを、最近は二つに再編成して、国後と択捉に集中配備しました。3500人規模を迫認した形です。

装備でも戦車などは1950年代、60年代のものから、やっと70年代、80年代のものに代えた程度です。ただ一方では択捉にある空港を拡張して、「イリュージン76」という大きな輸送機が発着できるようにしました。またフランスから1万5000人も兵士を運べるミストラル級強襲揚陸艦を4隻買って、そのうち2隻を太平洋艦隊に配備するのではないかと話もあります。

それから射程300kmの対艦巡航ミサイル「ヤホント」を装備する動きもある。しかし、対空とか対地でなくて対艦なので、実際に何に備えるのかいささか不明です。だから、これらは北方四島というより、北朝鮮とか、中国の北の方とか、さらには日本海方面もいらんで機動性の向上を図っているのではないかと

見方も出てくるわけです。具体的には、やはり中国の軍備の拡張、艦隊の増強を見ています。今は南シナ海の南沙、西沙群島や、尖閣諸島をめぐる動きが注目されているが、いずれ北の日本海から対馬海峡、オホーツク、さらには北極海の資源などをにらんで中国が出てくることに、ある種の備えをしているのではないかというわけです。

中ロ蜜月はもう終わっか。

次に中ロ関係を見ます。去年の9月にメドベージェフ大統領が北京へ行って、胡锦涛主席と第二次大戦終結65周年や「戦略的パートナーシップ」の全面的深化を謳い上げました。「尖閣諸島でギクシャクする日中関係を横目に中ロが緊密な関係をアピールした」というのが当時の報道です。朝日新聞は「大戦終結65周年の共同声明は、大戦の結果の史実を歪曲する試みを非難している。日本を名指しすることは避けているが、中ロが日本との間に抱える北方領土や尖閣諸島問題をめぐって、自らの正当性と領有権を示す狙いもうかがわれる」と書きました。

しかし、声明などをよく読むと、両国にとっての「核心的利益」については、



北京の中ロ首脳 (2010年9月)

ロシアはチェチェンなど民族紛争が起きているカフカス地方と旧ソ連地区、独立国家共同体(CIS)全体を「核心的利益」としており、中国は台湾、チベット、新疆での原則的立場を強調しています。北方四島はおろか南沙群島なども入っていません。ですからこの共同声明で尖閣や北方四島で中ロが立場を同じくしたとは、簡単に言えないのではないで

しょうか。

この後、メドベージェフは国後に行ったのですが、その直前にはベトナムに行って2基の原発を売る協定と引きかえに6隻の潜水艦を提供する協定と一緒に結びました。南沙で中国と対立し、海軍力の増強を迫られているベトナムに潜水艦を売り渡すということは、それほど中国のことを配慮していないと言えます。

また去年12月21日にメドベージェフはニューデリーへ行ってインドのシン首相と会談した。そこでは第五世代戦闘機の共同開発やロシア型原発2基の新設で合意しました。

インドは伝統的に中国と対立している国です。そこでこういう約束をするということは、ロシアという国は、結構その場その場で最大限自分の利益になることはしっかりやるという姿勢です。これから見ても、中ロが果たして強固で戦略的な共同歩調で日本に対してのとは言いきれないのではないでしょうか。

中ソ対立時代の中国は、北方四島問題で日本の立場を支持していました。1964年7月、日本社会党の佐々木(更三)訪中団に対して、毛沢東主席は「日本の北方領土返還要求に原則的に賛成だ」と語り、その後も中日友好協会の廖

承志会長が1979年に「北方領土は過去、現在、将来にわたって日本固有の領土であり、中国人民は断固日本人民による領土回復の正義の闘争を支持する」と言っていました。

しかし、ゴルバチョフ時代になって中ソ関係が回復に向かう中で、この問題について中国ははっきりした態度表明をしなくなりました。

1991年3月の記者会見で錢其琛外相は「北方四島問題で中国の立場は変わっていない」としつつも、「日ソ両国間の問題であり、交渉を通じて解決されることを望む」と言ったのが、結局、現在に至るまで中国の公式見解ではないかと思われまふ。もっとも最近「四島問題で態度は変わっていない」という部分を明言しなくなったようですが。

日本外務省の欧州局のある幹部は「中国の北方四島に対する態度は変わっていないはずだ。もし変わったらわれわれは台湾に対する態度を見直す」と冗談まじりに言っています。

打開のかぎとなるか、エネルギー問題

最後にエネルギー問題に触れておきます。ロシアは基本的に長期契約でヨー

ロッパにパイプラインで天然ガスを売るというのを国の経済政策の柱としています、それは財政的にも戦略的にもそうです。そこへ最近、中東のカタールが液化天然ガスの生産施設を大量に作ってガスをアメリカに売ろうとした。ところがここ二、三年の間の大きな変化なのですが、シェールガスといういままでのガス田の下の岩の中にあるガスを技術の進歩で取り出せるようになった。その結果、ガスの輸入国であったアメリカが自給するようになってしまった。しかもロシアを抜いて、第一位のガスの生産国の座を奪い返してしまった。

カタールはアメリカに売ろうとした天然ガスが売れなくなってヨーロッパに向わざるを得なくなった。そしたらロシアがパイプラインでヨーロッパに供給しているガスに競合する形で供給が急が増えてしまい、ヨーロッパ側はそれほどいらなくなってしまう。このためドイツあたりはロシアから長期契約で高く買っているガスを値引きしてくれと言いだした。そのドイツとロシアの交渉は昨年秋に始まって一時的な妥協として、ガスの需要が欧州で増える冬にいったん交渉を休止したあと、今年の春に再交渉をしようということになっていました。

その矢先に、3・11の東日本大震災が起きました。日本で急に液化天然ガスの需要が大きくなった。これでロシアは一息つきました。欧州でロシアのガスと競合していたカタールのガスを日本にふり向けさせることができるようになったので、値段も持ち直しました。

それ以前にロシアは北極海の領海にある大きなガス田を開発してアメリカに売ろうとしていましたが、シェールガスの出現などでアメリカは自給してしまい、当面は売れる見込みがなくなってしまいました。また東シベリアにもガス田があります。それは中国に売りたいのだが、中国はガスの受け入れ先の東北部の経済的な事情から石炭の値段でなければ買わないと言っていて、何年交渉しても決まらないう。6月の半ばにも胡锦涛がロシアに行きました。そこでまた交渉をしたのですが、またも決まらなかつた。

なぜ決まらないかという中国東北部の事情はこうです。パイプラインを引く先の中国の北部は炭鉱地帯であるために、発電などでガスを使いたくても石炭と同じ値段でないと経済的に大きな負担になってしまうので使えない。南のほうは石油で発電しているので、石油並みの価格でもないのだが、ということらしいのです。

(編集部注：6月16日の中口首脳会谈では、両国間の貿易額を2020年までに2010年の3倍の2000億ドルにまで増やすことに合意したが、天然ガスの対中輸出については合意できなかった。報道によれば中国が1000m³あたり250ドル以下を提示しているのに対して、ロシア側は欧州向け輸出価格に近い300ドル以上を求めているという。『日経』6月17日)

というわけで中国との間で天然ガスの協力が思うように進まないことから、日本との協力はロシアにとっても死活的に重要になっています。領土についてのロシアの本音は「2プラスα」、できれば「2(島返還)」でということでしょう。軍隊の配備も歯舞・色丹には国境警備隊しか置いていないし、閣僚もここには行っていない。二島返還を明記した1956年共同宣言もあるので、歯舞・色丹の法的な地位についても国後や択捉とは別という立場を、実際の動きを見る限り、とっている。だから、この二島は返して、国後・択捉については経済の優先開発権とか、自由往来権とかを認めるといったことで、妥協をなお探っているのかもしれない。



ベトナムのダナン港の米艦

あとは政治の問題ということになります。経済的にはロシアはシベリアと極東の開発問題があるので、5月の菅・メドベージェフ会談でも資源エネルギー庁の部長と外務省の欧州局参事官レベルで定期協議をしようということになった。たとえばガス田の権益を日本の企業が取れば、国際価格に左右されずに、日本側が自由

に使えるのでその点は有利になります。ただ領土問題を抱えての開発ですからなかなか難しい。政治的なりスクで没収されたり、資源が出なかったり、などということになれば、お金をつぎ込んだのに経済的な成果はなく、領土問題も進まないとなつては大変ですから、そこは慎重に決めなければなりません。

全体としてはメドベージェフの国後訪問で確かに緊張は高まりましたが、ロシアがこれから選挙の季節に入っているあいだ、領土は両国間の大きなイシューになりそうにない。ふたたび動き出すであろう選挙後に向け、日本側としては知恵をしばっておくべきです。しかし、肝心の日本の政治に、今、その余裕があるかどうか非常に心配な点であります。

(6月10日 火講演会)

講師略歴(おおの まさみ)

1980年朝日新聞社入社。水戸支局、外報部、東京社会部などで勤務。86年からサントペテルブルク留学、3度のモスクワ支局勤務で計11年、ロシアで仕事。ロシア文学にも詳しい。著書は「メドベージェフ ロシア第三大統領の実像」「グルジア戦争とは何だったか」等。